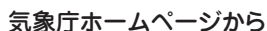




観測課 中川 豊

観測された成果は、政府関係機関や地方自治体はもとより、報道機関、民間気象事業者等でもリアルタイムに利用できるようになっており、国民生活に不可欠な防災情報や生活情報として使われています。このため、障害が少なく確実な観測を実施することが重要です。



2. 気象観測測器について

気象庁が観測している気象要素には、気圧、気温、湿度、風向、風速、降水量、積雪の深さ、降雪の深さ、日照時間、全天日射量、雲、視程、大気現象があります。大部分は気象観測測器（以下、測器）と、データ処理装置によって自動的に測定していますが、気象台等では一部の要素を観測者が目視により観測しています。

降水量、風向風速、気温等の気象観測データは、天気予報や注意報・警報発表といった気象庁の業務だけでなく、国土交通省・都道府県・市町村の河川管理部門や運輸・電力供給等の機関において防災や交通の安全、業務の効率的な運用を図る上で必要不可欠な情報として利用されています。

気象観測データの品質を向上させるためには、観測環境の整備や機器の保守点検が重要になります。測器は野外で日夜を問わず風雨や日射にさらされるといふ厳しい環境条件の中で長期間にわたって連続的にデータを収集します。

より良い気象観測を行うためには、精度の高い測器を導入するだけでなく、測器を適切な観測環境に設置すること及び毎日の点検をおこたらないことがとても大切になってきます。観測データの異常をいち早く捉えるために、全国の気象台では、観測データを常時監視しています。

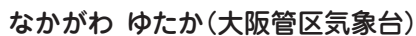
測器の感部の多くは屋外に設置しており、常に風雨にさらされています。観測装置の連続運用、観測精度を維持し故障を未然に防ぐには、観測施設と測器の保守も重要です。

以下の写真は左から気象官署、地域気象観測所、航空観測所の屋外機器類の一例です。



全国約60ヶ所の気象台・測候所では、気圧、気温、湿度、風向、風速、降水量、積雪の深さ、降雪の深さ、日照時間、日射量、雲、視程、大気現象の観測を行っています。このうち、雲、視程、大気現象については観測者が目視によって観測し、その他は地上気象観測装置による自動観測です。また、全国約90ヶ所の特別地域気象観測所では、地上気象観測装置による自動観測により、気圧、気温、湿度、風向、風速、降水量、積雪の深さ、降雪の深さ、日照時間、視程、大気現象の観測を行っています。これらの観測データを、注意報・警報や天気予報の発表等に利用するほか、気候変動の把握や産業活動の調査・研究等に活用されています。

（続く）



20